からだとは・病とは(96) 顎関節症の原因？

鈴木斉観（斉観堂治療院）

50代男性が来院。顎関節症で、矯正具を口内に付け、少しずつ矯正する治療を歯科で受けている。矯正の影響なのか顎がだるく、またそれ以前から季節の変わり目になると、からだ全体がだるくなると言う。頸椎ヘルニアがあり、時に下痢・軟便となり、のぼせる。

診ると、脈は波打たず、弱い。全身の気血の循環が悪いということだ。舌苔はやや厚い。胃の働きが悪く、飲食したものが胃内に常に残っている。心中（みぞおちの上）は邪熱（異常な気と熱気）がこもっている。それが舌先紅（舌先が赤い）に表れている。からだ全体のだるさはこの熱によってもたらされているものと思われた。お腹は硬く張っている。奥に気血不順によるスジ張りが多く、ガスが多いからだ。臍の下が虚（エネルギーが不足）している。胃腸の働きは悪く、下痢・軟便となる。そこへ行くべき熱気は上にのぼり、のぼせる。背中は全体的に凝っていて、心部裏側に邪熱を感じる。腰はやや虚し板状に張っていて、右側が少しスジ張っている。足は冷えていた。

体幹部の特に滞りが強いところに通じる手の経脈（気の流れの道筋）に鍼*管挿入鍼を行う。心部に通じる経脈では鍼を通して邪熱が出ていく。滞った足の経脈に鍼管挿入鍼を行う。これで体幹部の滞りが弱まる。顎周辺の滞った部分には、反応するツボに鍼管挿入鍼を行う。次に座ってもらい、首肩の凝ったところに軽く刺鍼する。それからうつ伏せになってもらい、背中の反応しているツボに刺鍼していく。心部裏側では奥に鍼が入った時に邪熱が出ていく。右足首の崑崙というツボ付近に頭から足方向に気が流れる様に軽く刺鍼し置いておき、虚している腰部にはお灸をして、エネルギーを補う。そうすると、背中全体に凝りが軽くなり、腰の板状の張りは軟らかくなった。気の流れの不順が軽くなったということである。仰向けに戻ってもらい、全体に空中鍼（鍼をかざす）で散鍼（ツボに関係なく全体的に軽く鍼をしていく）し、治療によって浮き立った気を処理する。最後に足三里という膝下のツボに空中鍼で斜め下に鍼を向け、治療でのぼせた気を降ろした。治療後、患者は立ち上がると、「いいですね。軽くなった」と言い、1回目の治療を終えた。その後、3・4日間隔で4回の治療を行い、状態が落ち着いたので、それ以後は週1回の治療となった。

6回目に来た時に、患者は、「今までなかなか矯正されなかったものが、鍼治療を始めてからは、急激に顎の位置が正しくなって来ている」と言う。歯科医の診察でも、顎が正しい位置になったと確認された。

元々、この顎関節症は、全身的な異常に由来するものだと思う。あるいはその異常の一部として、顎関節症があり、その裏側の頸椎ヘルニアがあるのだと想像する。だから、器具による強制的な矯正だけではすんなりいかなかったわけだ。全身的な異常が軽減した今では、自然と本来の位置に顎は戻ろうとしている。病を常に全身の問題として考える習慣が必要である。

器具による強制的な矯正は元々の原因によって抵抗を受ける。その状況で、果たして、矯正は可能なのか。そうした無理な矯正は新たな異常をからだにもたらすのではないだろうか。西洋医学的な治療にはこれと同様な問題があり、医原病の原因となる。(2018年12月冬至)

*.鍼管挿入鍼 － 鍼管に鍼を入れた状態で経脈に当て、やや圧迫しながら捻る。通常、鍼管は鍼を挿入し叩いて切皮できたら、取り除く。